

7-2 瀬戸内海の歴史と景観Ⅱ

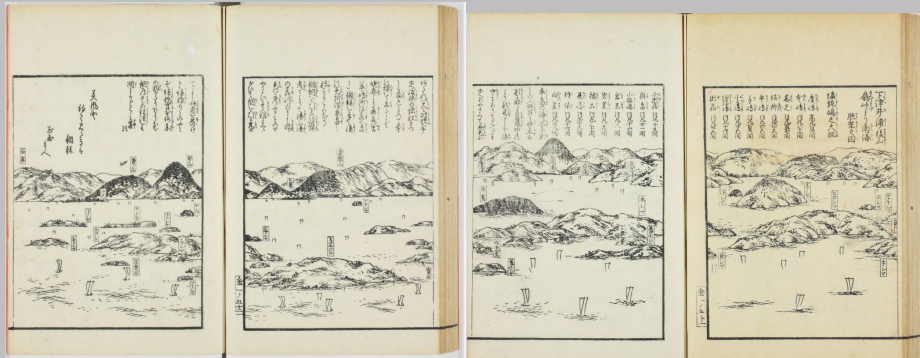
7 -2 瀬戸内海の歴史と景観Ⅱ

「庭」としての瀬戸内海

伝統的風景観が捉えた瀬戸内海の風景

歌枕、文学、故事、伝説による名所旧跡の豊富な地
近世～ 社寺参詣・名所遊覧等庶民の旅が流行
→多くの名所案内記、名所図会、紀行文等の刊行・普及
広く享受される瀬戸内海の「伝統的風景」

『金毘羅参詣名所図会』 「下津井ノ浦ノ後山扇峠ヨリ南海眺望之図」



香川県立図書館所蔵（香川県立図書館デジタルライブラリー）

「瀬戸内海の歴史と景観Ⅰ」では、「道」そして「畑」としての瀬戸内海に焦点を当ててみてきました。

この「歴史と景観Ⅱ」では、人々の憩いや安らぎの場である「庭」としての瀬戸内海についてみていきます。

瀬戸内海には、既にみてきた通り、いにしえより多くの人々の往来を伴う豊かな歴史があり、それゆえ、歌枕、文学、故事、伝説の地である名所旧跡が豊富に存在しています。

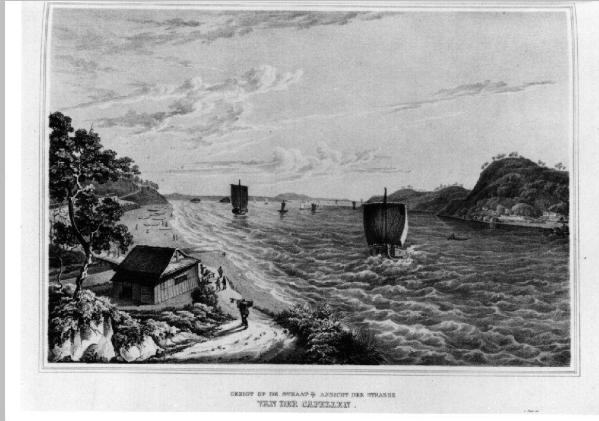
特に、社寺参詣、名所遊覧等、庶民の旅が流行した近世には、この地域に集積する個々の名所旧跡が、名所案内記、名所図会、紀行文等を介して、広く人々に親しまれました。

ここで人々に愛でられてきた瀬戸内海の風景は、その名所旧跡たるゆえんである、歴史的・文化的背景に基づき、特定の場所に焦点を当てたものでした。

欧米人によるまなざし

近代的な地理的概念で捉えた「内海」「多島海」の風景、形状や色彩など、科学的まなざしで捉えた瀬戸内海の自然景観、生業景観、生活景観、人文景観に対する注目と賛美

シーボルト（1852）『日本』の挿絵：関門海峡

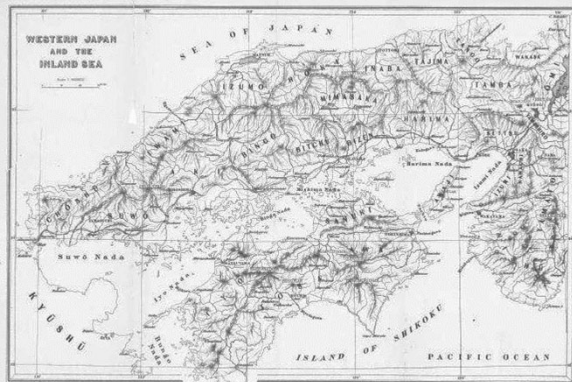


国際日本文化研究センター所蔵（日文研データベース外像）

近代に入り、瀬戸内海を旅するようになった欧米人による風景評価は、それまでの伝統的な瀬戸内海の風景の見方に大きな変化をもたらしました。西田正憲によると、欧米人のなかで、瀬戸内海風景に対する、賞賛の記述をつぶさに残した最初の人物は、ドイツ人のシーボルトです。シーボルトは1826年、オランダ商館長の医師として長崎出島から江戸参府に随行し、瀬戸内海を船で往復しました。その航程で見た、瀬戸内海の風景の美しさを、紀行文で賞賛していますが、ここでは、近代的な地理概念のもとで、瀬戸内海を海峡に囲まれた、「内海」「多島海」と捉えたうえで、目に次々と映る様々な形状の山岳や島嶼などの自然景観、色鮮やかな田園などの生業景観、集落などの生活景観、城郭などの人文景観の魅力を多彩に記述しています。以後、19世紀を通して、数多くの欧米人による同様の見方に基づく、瀬戸内海風景の賞賛が、紀行文、見聞録、地誌等に掲載され、広まっていきました。

近代的風景観による「瀬戸内海」風景の普及と定着

19世紀後半 近代ツーリズムのなかで、欧米人の評価がピーク
→日本国内にも同様の新しい「瀬戸内海」風景の見方が普及
絶景、絶勝、「世界の公園」としての賛美
『日本旅行案内（第三版）』1891に掲載された'the Inland Sea'



国際日本文化研究センター所蔵（日文研データベース外像）

このような欧米人による瀬戸内海風景の見方と評価は、19世紀後半、近代ツーリズムが流行するなかでピークを迎えます。

ロンドンのマーレー社による世界各地を対象とした定評ある旅行ハンドブックにおいて、チェンバレンとメイソンを編者に迎え大幅に刷新された1891年出版の日本編第3版にも、「the Inland Sea」として瀬戸内海が登場します。

この頃、日本人の間でも、同様の新しい「瀬戸内海」風景の見方が普及していきました。

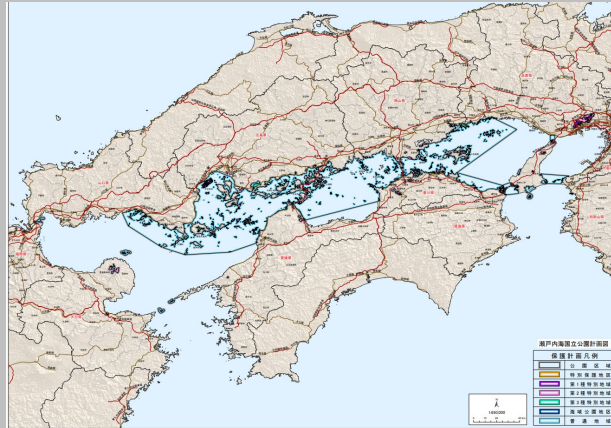
「瀬戸内海」を一つのまとまりのある海域として捉える空間概念のもと、欧米人の賞賛を引きつつ絶景、絶勝として、また「世界の公園」として賞賛する記述が明治後期に国内で出版された紀行文や案内書、風景論にしばしば登場しています。

瀬戸内海国立公園の誕生

昭和9（1934）年3月16日

日本最初の国立公園のひとつとして「瀬戸内海国立公園」指定
内海多島海景観を指定理由に、視対象とその展望地を指定
→以後、陸域・海域共に追加指定・区域拡大

現在の瀬戸内海国立公園の区域



出典：環境省瀬戸内海国立公園 <<http://www.env.go.jp/park/setonaikai/intro/index.html>>

このような新しい瀬戸内海風景の見方と評価の延長線上に、瀬戸内海は1934年、雲仙、霧島と共に日本で最初の国立公園に指定されました。
ここでの指定理由は「内海多島海景観」であり、視対象となる多島海景観の海域・陸域と、視点場となる展望地の陸域が公園区域として指定されました。

第1次指定区域の鷲羽山から望む塩飽諸島の内海多島海景観



(坂本安輝子氏 撮影)

最初の公園区域設定において主たる視対象とされたのは、標高100～300メートルの展望地から俯瞰した、備讃瀬戸の「内海多島海景観」でした。写真はそのひとつ、鷲羽山（わしゅうざん）から望む塩飽諸島（しわくしょとう）の現在の景観です。その後、公園区域は陸域・海域共に順次追加指定・区域拡大され、現在に至ります。

■ 海を基盤とした自然との関わりの変化と景観の変貌

瀬戸内海と生活

外海のように波が荒くない穏やかな内海

▶ 水際まで人家が密集し、海と人の関係が密接。

六島の集落景観（岡山県笠岡市六島）



これまで見てきた通り、近代的風景観のもとで、瀬戸内海の風景は国内外の人々に広く愛でられるようになりました。

彼等が注目した自然景観、生業景観、生活景観、人文景観のうち、特に生業、すなわち生活景観の作り手・担い手である住民の営みには、瀬戸内海地域全体に共通する大きな特徴があります。

「瀬戸内海の歴史と景観Ⅰ」で見てきた通り、この地域に暮らす人々の生業は、海を基盤とし、土地の自然と深く結びついて営まれてきました。生活もまた同様で、瀬戸内海は、外海のように波が荒くなく、基本的に穏やかな海面なので、沿岸部や島嶼では水際まで人家が密集した集落や町が形成され、海と深いつながりのもとに暮らしが営まれてきました。

海を基盤に、土地の自然と深く結びついた生活・生業



海の神、山の神、
海と結びついた信仰、
石に宿る信仰、
樹木・植生に宿る信仰

子妊石（岡山県笠岡市高島）



琴弾八幡宮（香川県観音寺市）



大山祇神社（愛媛県今治市）



瀬戸内海の各地にみられる、長く継承されている信仰の場は、瀬戸内海を特徴づける人文景観であると同時に、海を基盤に、土地の自然と深く結びついた生活や生業が営まれてきた証でもあります。

ここに挙げているのはその一例にすぎませんが、海の神や山の神を祀り、海上交通の安全や海からの恵みを祈る海と結びついた信仰、また特徴的な石や樹木に宿る信仰など、信仰の場やそこでの伝統行事には、海とのつながりのもと、自然とともに生きてきた人々が育んできた瀬戸内海地域固有の文化が息づいています。

瀬戸内海の変貌

1960年代～ 急激な経済成長に伴う沿岸開発の推進

干拓・埋め立てによる大規模な臨海工業地帯の広がり



しかし、このような海を基盤とした土地の自然とのつながり、そしてそれがもたらす特徴的な景観は、20世紀後半、高度経済成長期に急速に進んだ都市化・工業化によって大きく変貌しました。

1960年代、沿岸域には大規模な干拓・埋め立てにより造成された土地に築かれた臨海工業地帯が連なり、海との距離は遠くなりました。

工場からの排水や排煙は、海水の富栄養化や汚染、植生への悪影響をもたらし、基盤となる海をはじめ、この土地の自然そのものを変質させました。臨海部、海に流れ込む河川の下流部では急激な都市化が進み、これによる生活排水の影響等で、流域圏の自然もまた、大きく改変されました。

消える塩田
白砂青松の砂浜→自然海岸の減少

随所に見られる人工海岸



瀬戸内海を代表する生業景観であった沿岸部の入浜式塩田は、イオン交換膜による製塩法の開発に伴い、1971年にすべて姿を消し、広い塩田の跡地はゴルフ場や工場用地、養殖場に置き換わっていきました。

製塩業と深い関わりのもとにあった「白砂青松」の砂浜は細り、マツは枯れ、またこのような自然海岸自体が、沿岸部の開発に伴い喪失していきました。

コンクリートブロックなどによる人工護岸や道路等の構造物が随所にみられ、直接海水に接しているところはほとんど人工海岸となり、人々と海との距離は遠くなりました。

耕作放棄地の増加と植生遷移

随所に見られる段々畑の痕跡



工場排水、生活排水による海洋環境の破壊や海水の富栄養化や汚染により、海からの漁獲量は急減し、産業構造の変化と相俟って漁民数が減少し、各地で限界漁村集落が生まれました。

かつて、人の営みや生業を介して海と繋がっていた山野部も、社会構造や生活様式の変化により過疎化が進み、耕作放棄地が増加しています。

かつて、国内外の人々が強く心惹かれた、瀬戸内海の風景美を支えていたのは、この地域で醸成されてきた、海を基盤とした土地の自然との様々なつながりでした。

このような伝統知・地域知の価値を見直しながら、新たな人と自然との関係性を紡いでいくことが求められています。

参考文献

- 北川建次・関太郎・高橋衛・印南敏秀・佐竹昭・町博光・三浦正幸編（2007）『瀬戸内海事典』、南々社
- 公益社団法人瀬戸内海環境保全協会（2005）『瀬戸内海—里海学入門』、公益社団法人瀬戸内海環境保全協会
- 白幡洋三郎編著、合田健監修（1999）『新・瀬戸内海文化シリーズ 1 瀬戸内海の文化と環境』、公益社団法人瀬戸内海環境保全協会
- 西田正憲（1999）『瀬戸内海の発見』、中央公論新社